

イサムノグチ庭園美術館〈彫刻庭園〉の 作庭の変遷と庭園要素に着目した空間構成に関する研究

小林 徹平
TEPPEI Kobayashi

イサムノグチ庭園美術館〈彫刻庭園〉について、文献調査・現地調査・ヒアリング調査を行い、制作以前の様子・制作・完成後約 20 年後の庭園の現況について整理をおこなった。考察では、ノグチの他作品との比較、庭園の構成要素の特徴、素材感や形に着目して、庭園内・庭園外部とのつながりを明らかにした。

Key Words : イサムノグチ・彫刻庭園・作庭過程・庭園要素

1. 研究の背景と目的

2007 年土木学会デザイン賞〈最優秀賞〉を受賞したモエレ沼公園は、北海道の雄大な大地の中に見事なスケール感の公園を制作した。この公園は彫刻家イサムノグチ (以下ノグチ) (1904-1988) が 1988 年にマスタープランを作成し、多くの人々がそれを長い年月をかけ完成させた公園である。授賞の講評では「ランドアートともいえるこの壮大な環境彫刻空間は、豊かな芸術性を保ちながらも、人間の情緒に強く、そして素直に訴えかけるリアリティを持っている。多様な意味性とシンプルな造形性は、絶妙のスケール感に支えられて、北海道の風土とそこに住む人々の気質に素直に響き合っているようだ。」¹⁾と評されている。モエレ沼公園同様に大地・自然と対峙しながら庭園を創作した場所で、周辺の環境をイサムらしい発想のもとで取り込み、その造形においても優れたデザインをしていると考えられる彫刻庭園が香川県高松市にある。彫刻庭園はイサムの日本での生前の自邸・アトリエ・展示蔵等を美術館として開放している、イサムノグチ庭園美術館の中の一部である。この庭は「価値あるものはすべて贈り物として残る」²⁾「未来への贈り物」²⁾と考え制作された庭である。本研究では、イサムノグチ庭園美術館、彫刻庭園を対象とし、ノグチがどのような空間の制作を行なったのか、作庭以前の様子から、庭園完成までの変化及び空間構成を把握する事を目的とする。



Fig 1: モエレ沼公園

2. 研究の位置づけ

2-1. 既往研究

ノグチに関する研究論文は初期の庭園 4 作品と伝統的日本庭園との関連を示した研究^{3,4)}、実現に至らなかった建築家ルイスカーンとの共同計画「PLAY GROUND」に関して、文献調査を行い、制作論的視点をノグチの言葉からまとめた研究^{5,6)}、札幌のモエレ沼公園について、計画段階・幾何学的空間構成・7つのプレイエリア

についての相互関係を配置・遊具の形態・配色を考察した研究⁷⁾がある。出版物では、アナ・マリア・トーレス「空間の研究」⁸⁾で作品を時系列に並べたものがある。

2-2. 研究の方法

本庭園に関する研究は「空間の研究」で多くの作品の一部として紹介されてはいるだけである。本研究では、作庭以前の様子・作庭過程・デザインについて以下の方法で調査し、それをもとにノグチの風景の取込み方、また過去の作品との関連から考察を行なう。

1) 文献調査

既存出版物・及びイサムノグチ財団 (日・米)、ノグチ関係者から資料を収集し、ノグチ本人及びその作品、また本庭園に関して整理を行いまとめる。

2) 現地調査

本庭園美術館にはデフォルメした現況図面はあるものの、実際には図面が存在しない。そのため現地での実測・目測・スケッチから平面図を作成を行なう。また庭園の現時点での様子を、庭園の四季を通して観察する。

3) ヒアリング調査

既存文献で調査しきれない事や、ノグチに関する話を関係者にヒアリングを行う。対象者は庭園作庭に関わった笹尾正美、和泉大成 (石のアトリエ)、当時ノグチと生活をした経験のある川村京子、モエレ沼を完成に導いた建築家川村純一である。

3. 基礎情報の整理

3-1. イサムノグチ

1) 概略

ノグチは父野口米次郎、母レオニ・ギルモアの日米の混血児として 1904 年 11 月 17 日にロサンゼルスで生まれ、1988 年 12 月 30 日ニューヨークで亡くなる。アメリカと日本の両国、さらには世界をまたにかけ活動し、仕事場も高松・ニューヨーク・イタリア、ピエトラサンタ等にあった。ノグチは政治・宗教またギリシア神話・土着の音楽や文化に深く精通しており、日

本においては、夢窓疎石の庭やまた生活に根差した障子や農機具等の「使っているものが、美しい。農機具にしても、そしてそれがどんどん洗練されている」⁹⁾ 姿が好きであった。そんな思いから岐阜提灯を利用した作品〈アカリ〉は「障子を通した太陽の光のようなもの」¹⁰⁾ とし、人々の手元に利用されることを願い生み出した光の彫刻である。その他にも、石やブロンズによる彫刻、陶芸的な作品や遊具、庭園・ランドスケープ、パブリックアート、噴水、舞台装置、橋の高欄のデザイン等多岐にわたり作品を残した。ノグチは物事の本質を求め、自身の言葉で「私たちが関わりある全ての素材が持つ、



Fig2: アカリ

時間や空間、素材そのもの持つ意味をすること」¹¹⁾ と考えていた。今回対象としている庭等の空間に関しては1933年〈鋤のモニュメント〉から始まり、同じ年モエレ沼の原型と自身が話している〈遊び山〉の設計も行っているが、これはどちらも計画で終わっている。〈遊び山〉の構想から約20年後、1951年初めてニューヨークで〈リーダーズダイジェストの庭園〉が実現した初の庭園作品となる。それ以降庭園や屋外パブリックアート等の制作は約40ヶ所にのぼり、広場・庭園は約20カ所実現した。その作品は日本、イスラエル、ニューヨーク・ロサンゼルス、パリ等世界中に広がっている。



Fig3: 鋤のモニュメント

2) ランドスケープ作品

〈土門拳美術館庭園〉(1984)を制作した際、ノグチが一番最初に考えた事は、「石はどうでも良い。我々は彫刻家だからそんなものは簡単なんです。いちばん難しいのはこの全体の空間を理解して、その中にどれを、どこにものを置くか」¹²⁾ と話しをしたように、ノグチは作品をつくる場所の意味・本質を捕えて、制作に取り組んだ。その思いを遂げる、最後の対象地となったのが〈モエレ沼公園〉である。ノグチは1988年ゴミ処分場を訪れた際、「これは僕がやるべき仕事です。」¹³⁾ と言い、ゴミ処分場を子供の場所へ、新しい価値を創造した。以下にそれ以外にノグチの特徴的な作品を4作品を紹介する。



Fig 4: 土門拳美術館

a) リーダーズダイジェスト (1951)

北側に見られる築山は日本の庭園の影響が強く見られる。有機的な曲線の上に自然物、植物・石組みが構

成されている。有機的な築山ゾーンと建築内部の入り込むんでいる矩形のゾーンが明瞭に分けられている。池の中に浮かぶ彫刻は大阪

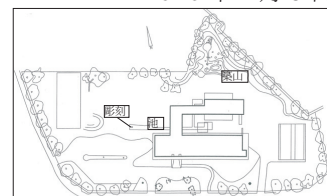


Fig5: リーダーズダイジェスト

万博の噴水を連想させる。ノグチはこの作品を通して、「世界一熟練した造園家、つまり日本の普通の植木屋から色々と学ぶ機会を得た。この敷地内にある石を使って彼らとともに泥のなかで働きながら、私は石を配置する基本原理を身につけた。」¹⁴⁾ と言葉を残している。

b) ビリーローズ彫刻庭園 (1960-65)

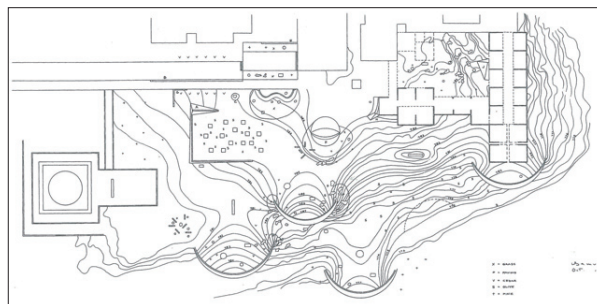


Fig6: ビリーローズ彫刻庭園

1948年に建国し、イスラエル建国記念10周年を記念して建設されていた国立博物館に隣接する敷地で、ニューヨークの興行師ビリーローズが現代彫刻のコレクションを展示するため依頼された。この敷地を聖書の中で「静寂の地」¹⁴⁾ と呼ばれる神聖な丘だと知ったノグチは、ひとつの彫刻として全体が、大地そのものの一部となるよう計画し、その精神性において「私たちの時代のアクロポリスとなって欲しい」¹⁴⁾ と思いを込め、庭園を作成した。庭園を構成する大地は、博物館から緩やかに下降する起伏を生かして作られ、人は様々な距離や角度から彫刻を見て回る事ができる。この大地を支える5つの石堤には、整地の際に出た粗石を使用し、空を背景とした正面入り口にはノグチの〈つくばい〉が設置されている。晩年建国間もないイスラエルについて「意味性・継続性のアイデンティティを与えた」¹⁵⁾ と語っている。

c) IBM 本部庭園 (1964)

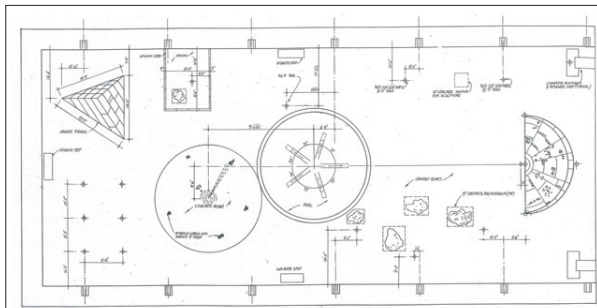


Fig7: IBM 本社北側庭園平面図

IBM にはふたつ庭がある。過去の庭と未来の庭である。この北側の庭は「庭のテーマは科学と人類の未来」¹⁴⁾ と言い、大理石の半球には科学的進歩の臨界公式が彫られている。南側ではそれとは逆に、割れ目の入った岩石を用いて「私は人類の過去を表現する」¹⁴⁾ と有機的な石組みが組まれている。北庭では、南庭の有機的な庭との対比から、幾何学的要素が強くなっている。北庭は、幾何学的形態の上に数本の本や石を配置する作庭方法が見られ、これはノグチの作品で多く見られる。

d) カリフォルニア・シナリオ (1980-82)

生まれ故郷であるカリフォルニア州で初めて庭園を制作することとなった。シエラネヴァタ山脈、砂漠、森林、農地などの、カリフォルニアの自然や生活を象徴する 7 つの彫刻によって構成されている。

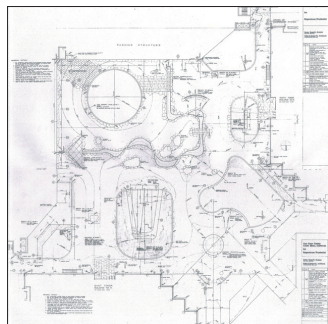


Fig 8: カリフォルニアシナリオ平面図

この作品はイサムノグチの最高傑作とも言われている。形態的には幾何学的造形の中に、自然物が配置されている。しかし、水の流れを表した水路では有機的な曲線となつてはいるが、素材では切り石の様な角のある石を利用している為、素材というミクロな面で幾何学性のもつ鋭さのようなものが読み取れる。c) の IBM の図面では解りやすいが、ノグチは二つのものを配置する際、一つの要素が持つ軸線を微妙にずらした所にもう一つの要素を配置する傾向がある。カリフォルニアシナリオでも、細かいところでずらしを見る事ができ、これもノグチの作風でよく見られるものである。この作品と時を重ねて、彫刻庭園の作庭への着手が始まっている。

3-3. 庭園美術館の概要

1) 立地

イサムノグチ庭園美術館は四国の香川県高松市牟礼町にある (Fig 10)。周辺は北西に瀬戸内海、北東に五剣山、東に屋島が聳えている。牟礼町とその北に位置する庵治町にかけての山は良質な細粒黒雲母花崗岩、庵治石の産地として知られ、東の本小松石、西の庵治石として知られ、丁場 (石切り場、採石場) とそれ



Fig 9: 庭園美術館周辺地図

を支える技術者が飛鳥時代からいる石の町である。

2) 庭園美術館

庭園美術館はイサムの日本における自邸 (イサム家)・アトリエ・彫刻庭園を、没後 10 年の時を経て美術館として開かれた場所である (Fig 11)。1969 年に自邸・アトリエ (石壁サークル、作業蔵) 造りを開始後、1964 年から共同制作を始めた牟礼の石匠和泉正敏と共に 20 余年にわたり制作活動した場所である。自



Fig 10: 庭園美術館平面図

邸は、香川県が 1968 年に有形文化財に指定した 1800 年代前半の武家屋敷を洋風の生活に慣れたイサムが、日本の伝統的建築に合う様に改修したもの、またアトリエにある展示蔵はイサム自身が作品を雨・風から守りたいという願いから 1800 年代後半の酒蔵を移築したものである。展示蔵の中には代表作であるエナジーヴォイド (Fig 12) 等が収蔵されている。

3-4. ヒアリング調査

1) 調査概要

対象者は庭づくりに携わった笹尾正美、和泉大成、最後の作品モエレ沼公園の設計を行った建築家川村純一、純一の妻であり晩年イサムと生活をともにした川村京子である。川村純一夫妻には、ヒアリング調査と伴に貴重な資料の提供をして頂いた。

2) 調査結果

石の配置に関して、ノグチはアトリエで石を切る為に 5 分程度しかその場に置いておく必要のない彫刻でさえ、こだわって配置を行ったことや、多様な作家と付き合いのある石工からすると、ノグチの彫刻の曲線は独特である事がわかった。また庭の作庭過程について、4-3. 作庭手順と空間の描写でまとめた。

川村夫妻からは、ノグチの優しく親切な人柄や夢窓国師を折り合いにだした庭の価値や自然に対する想い、モエレ沼公園の設計の際、公園の施設や形の説明では過去の作品の話を持ち出すことによりイメージの伝達を行っていたこと等資料では確認出来ない話を伺うことができた。彫刻庭園に関しては昼の食事の後に散歩等で訪れていたことや、庭園の中の石壁が大好きだった事等がわかった。

4. 彫刻庭園の作庭過程及び現況

4-1. 分析の方法

庭園に関する資料の有無は下記にまとめた。

Table1: 各期の資料の有無

	平面図	写真	コメント
I 期：作庭前	○	○	○
II 期：初期案	○	○	○
III 期：作庭中	×	○	○
IV 期：制作後	×	○	○

上記の資料に基づき、庭園の変遷についてノグチの庭に対する考え (4-2)、庭園を構成する要素について、計画案と現状の比較とそれに関するノグチのコメント (4-3)、作庭手順及び空間の描写 (4-4) をまとめ、庭園に関する考察 (4-5) を行う。

4-2. 庭に関する考え

1) 1982.12.20_計画図面

「このステージのように確認できるのは、京子が琴や歌を歌う場所です。私はあなたの声や琴を聞く事が出来ます。私は純一と京子がここへ滞在できるように家を建てる事を願っています。」¹⁶⁾ これは当時親交を深めていた川村純一・京子夫妻宛に平面図とその図面に關して 1982 年 12 月 20 付けで書かれたメッセージである。図面にもステージや建物が描かれ (Fig14)、この想いから 1983 年の作庭中の庭で、ノグチは京子に庭で琴を演奏させた (Fig11)。

Fig 11: 1983 年秋 琴の演奏
(琴: 川村京子、横: イサムノグチ、撮影: 川村純一)

2) 1983.11

「今月、79 才の誕生日を迎えることになり、日に日に思いを強くしています。四国の寄寓の地に庭園をつくることでそのお祝いをします。それは、未来への贈り物であり、又、私の母を庇護してくださった方々や、私に幼年時代の歳月を与えて下さった方々への贈り物でもあります。」²⁾と言葉を残し、贈り物としてこの庭を残した事が分かる。

4-3. 作庭と現況

1) 作庭前

庭は断面図から分かる様に勾配が 27.5 パーセント程あり、建物等は無く畑があった事がわかる。畑は和泉正敏の母が生前じゃがいも等を作っていたが、亡くなった後は放置されていた。この急勾配な場所に庭を制作した。

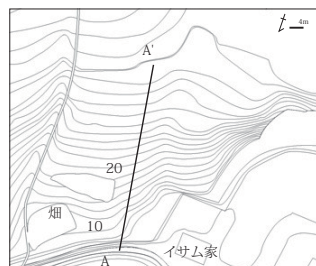


Fig12: 1969 年地形図



Fig 13: 1969 年 A-A' 断面図

4-2. 初期案と現況

初期案と現況を基に地形の形、階段、ステージ、水の表現、展示空間、展示空間横の石、建物、丘の上の石、その他の初期案では見られない石について Table2 へまとめる。

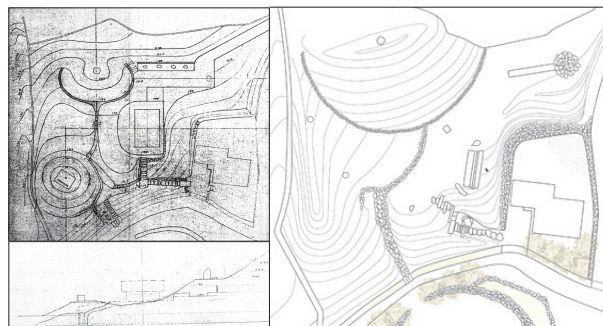


Fig14: 1982.12.20 平面・立面図 Fig15: 現況 平面図

Table2. 初期案と現況

	初期案	現況	コメント ¹¹⁾
地形の形	既存地形に対して大地を削り平場を生み出し、南東側には既存地形を活かす様に楕円形の丘を作ろうとしている。丘をあげる為に、南側には階段を設けている。北西側には、円形に一段高いスペースを設けている。	南東側と北西側を高く設けているが、初期案と違い連続的に周囲より高くしている事が分かる。南東側は、緩やかな曲線で繋がれ、北西側は南東側から伸びる馬の背のようなのびのびとした丘になっている。丘をあげるには、北側をまわる必要がある。	—
階段	家の前とアトリエ側の 2箇所に計画されている。	家の前の一カ所のみ制作され、有機的な軌道で庭園へ続いている。石段には矩形に近い石から、多様な形を持つ自然石が使われており、階段屈折点では、巨大な石が設けられている。	アトリエ側について、「実際に歩くにはきつすぎまして。一時、階段を作ってもいいかと考えたのですが、どうやらそれは問題外のようなのです。」
ステージ	周囲より一段高く設け、アトリエに近い場所へステージを設けている。	特にステージ等は無くなり、庭園を見渡せる丘となっている。	—
水の表現	南東側の高い所から楕円形の縁取られた所を起源とし、アトリエ側の階段横まで、石の道が描かれている。しかしこれが水を表現していたかは不明。	南東側の丘を縁取る様に作られ、水の道を石で表現し、上流から石を大きくし、初期案で階段がある地形が急な部分では滝を表現した石組みが組まれている。	水というのは私は発見したのですが、地表をぶらぶらしたり流れたりする事が好きなのです。ここでは抵抗が少なく、より綺麗です。この滝が庭のデザインに欠くことのできないことがわかり頂けるでしょう。
展示空間	丘の南側に土留めの壁を設け、その前には作品を並べるスペースが作られている。	展示スペースはなくなり、石壁が作られている。石壁は土留めの機能をもった、作品と呼べる石組みが組まれている。一つの大きな石の面の多面を見せることで、石の表情を良く見せている。作庭当時と比べ、色が大地となじみ始めている。	石壁について「この石はどれも石置き場に行った時にその場にあったもので、(中略)こちらの石を使おうと思い、半ば自然に返したのです。」
石	展示空間の向かい、庭の端に自然石を配置している。	長方形の石を配置し、その上には「スカイミラー」が置かれ、石の端には丸い石をいくつも利用した、柔らかなピラミッドの様なものが積み重ねられている。	私は梁(長方形の石)が石の堆積から突き出している構成を作成しました。
建物	家側の石段を登った正面の平場に平屋程度の建物がある。	石舞台(多数の石を敷く)を設け、家に近い側には背後の屋島を意識した「山の中の山」を設置している。	庭を眺める、見晴し台なのです。一時は上に小屋を建てることも考えていましたが、眺めを楽しむ場所をね。

丘の上の石	南東側の丘の上の中心に石が設置されている。	丘の上の瀬戸内海、屋島、五剣山が一望できる眺めの良い所に石が置かれている。これはノグチの没後、日本での葬儀の際に設置されたもので、その中にノグチの遺骨を収めている。ノグチがこの中に入りたいという思いから、ノグチの大好きだった石に和泉正敏が中心となり設置した。初期案立面図に今置かれている石と読み取れる石が描かれている。	—
石	—	石段をあがった直後、石舞台の南、北側、丘の途中に自然石が置かれている。正面には灯籠の笠をひっくり返した灯籠が設置されている。	石段をあがった直後の石について「形が面白いのでとっておいたのです。」(1961年京都の宇治川で採取した石)

4-3. 作庭手順と空間の描写

1) 作庭手順

作庭はまず地形の造成より始めた。造成の最中、台風が三度訪れ土が流される等したが、その度にもとの形を作り直した。この時水の流し方について検討を行い、現在の形が決定した。造成が終わると、まず庭へあがる為の石段が置かれ、それと同時期に石の滝・石壁等の制作を行なう。滝の石組みは一見無造作に置かれているが、ひとつずつ組んでいった物である。石壁の造成が終了した後、その向かい側に長方形の石を設置し、その南側に丸い石積みを設置した。最後に石舞台を設置し、母親へのオマージュとしてユウカリの木や、丘の上を桃源郷にしたいと願い桃の木、大好きだった柿、その他松・桜・等を植樹し、またフェスクという野草の種を撒き、作庭を終える。ノグチは作庭において、単体彫刻を作る様に、その場で土地と向かい合いながら制作を行った。



Fig16:1983 年秋 造成中

2) ノグチの空間に対する描写

この庭は自然への讃歌だと言われるかもしれません。私はこの庭大変楽しんでます。水が出ようが、台風が来ようが、この庭はまったく何の影響も受けません。草やあらゆるものが湧き出すのですが、流されていってしまうものは何もないのです。これは素晴らしいことだと思います。

裸の状態を見て頂いた小丘に草が生えてきました。今ではすっかり覆われています。自然が、誰にもできないような具合に完成させた構成なのです。¹²⁾

4-4. 考察

1) 展示空間の処理について

初期案の展示空間は、庭園の中で尾の様な部分となっており処理のしづらい場所となっている。作庭の際は

2010年2月5日
石等運び込む為に利用した公道へと続いている。初期案では展示空間を平場へ飛び出す様な形で配置し、庭園の中心方向から見ると、その向かい側にある石がアイストップとなる様な形で配置、処理されている。しかし、現況空間では庭園側から道を簡単に眺めることができるようになってしまっている。この変化は、1983年3月にマチュピチュへ行ったことが大きく影響している。ノグチは石壁について「これはペルーで見られる石の質を思わせるものです。」¹²⁾と語り、さらに丸い石の石積みについて

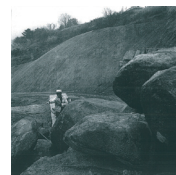


Fig17:1984.4.11

「私は庭をつくり始めたとき、すでにこれをここに置いていました。」¹²⁾と話している。丸い石積みは長方形の石の上に被さる様に設置していることから、実際の作庭は庭作りの終盤に行われているが、ノグチの頭の中で組み上がっていたものと考えられる。初期案と比較しこの処理の変更は、三つの石組(石壁、長方形の石、丸石積み)の緊張感により尾の部分の脆弱性を補っている。丸石積みの配置は、その向かい側にある石壁の終わる点を境として始まり、両者の放つ存在感が相殺しない様に考え配置されている。



Fig18:1988

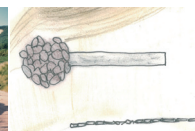


Fig19:1988

Fig20: 石壁と丸石積み

2) 連続した風景

この庭に入り込むと、庭園内の石や樹木、庭園を囲む植物、遠景として屋島や五剣山といった自然的要素に囲まれている為、自然と一体となった庭という印象をもつ。これはもちろん庭園を構成する主要素が自然物からできていることに起因するが、五剣山や屋島の形態の特徴がより、庭が周囲と一体となった印象を与えている。それは五剣山は彫刻の様な四つの丸みを帯びたこぶがあり(元々は五個のこぶ)(Fig21)、北側へ行くにつれ採石場のため、山が削れた岩のゴツゴツした岩肌を遠くからも確認でき(Fig22)、また屋島は山頂部分が広く、伸びやかな台形に近い形(Fig23)をしている。二つの山の持つ要素が、庭園内の石の持つ素材感やゆるやかな丘と共鳴している印象を与えるのである。



Fig21: 石舞台からの眺め



Fig22: 五剣山石切り場



Fig23: 屋島、石舞台

次に庭園を構成している要素に着目する。石舞台と階段の間の自然石(Fig24)は、大きな丸い石を割った石

を配置している。これは割れた石の面を石舞台側に向け、地面と垂直に設置することで、石舞台を構成する矩形の丸味のない素材感と近似した素材感をみせている。その矩形の固い素材感は灯籠の笠にもつながっていき、最終的には丘のゆるやかな曲線を引き立てる配置となっている。

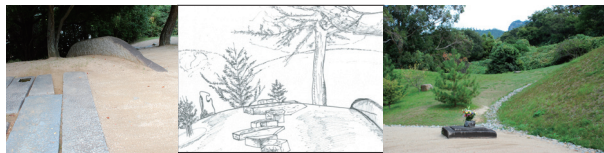


Fig24: 石舞台と自然石 Fig25: 石段、右に自然石 Fig26: 灯籠の笠

石舞台横のもう一つの石は、丘側見ると相反する形をしており、石段側から見ると石壁に向かうその同様な素材感 (Fig28) を伝えている。その丸みを帯びた曲線は長方形の横の丘に対する柔らかい曲線へのアプローチにもなっており、石舞台側から見ると、丘の稜線の形と近似していることがわかる (Fig27)。

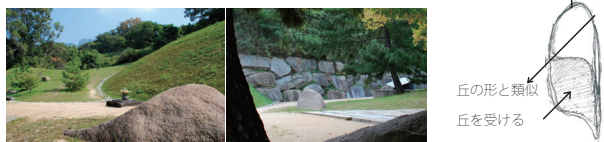


Fig27: 自然石と丘 Fig28: 自然石と石壁 Fig29: 自然石について

イサムは単体彫刻は、得てして 360 度顔を持つ。それは庭園内の要素に於いても同様であることがわかる。イサムはその造形力とバランス感覚から、その形や素材感から大別すると、引き立て、アプローチ、共鳴の役割をもたせ、その各種の共鳴から緊張感を生ませている。

5. ノグチ他作品との比較

ノグチの他の作品と比べると極めて幾何学性が一見弱いように感じる。同年代に作られたカリフォルニアシナリオでは、平面図、視覚的に幾何学性が読み取れる。(Fig30) 彫刻庭園では、平面図からだと、丘の形、石灯籠等幾何学形態を伴っていると言えるが、その庭園の要素が極めて自然的要素から構成されている為、明確には捉えづらい。むしろそれよりも、有機的な要素によるつながりの連鎖が、極めてこの庭の独自性と考えられる。またノグチは〈つくばい〉で知られるように、日本の文化では本来水を溜める機能を果たすものを、逆に水がわき出す機能を持たせる一種の機能置換を行っているが、この庭では灯籠をひっくり返すことや、実際に流れる水を基に、水の流れを石で表す枯山水を試みている。



Fig30: カリフォルニアシナリオ

6. 結論

ノグチの庭は極めて彫刻家らしい発想から作られている。それは日本では彫刻庭園やモエレ沼公園等、元々形のなかった場所に、新しい形のアイデンティティを与え、その形もノグチ曲線と言って良い独特な形である。しかしその一方でノグチの作品の配置感覚は、日本の間の文化から学んだとノグチ自身が話しているが、極めて自然的である。同時期に作られたニューヨークのノグチミュージアムもそうだが、確かにそこに彫刻は配置しているけれども、注意していないと通り過ぎてしまう様な一見デザインされていない印象を受ける。少なくとも極めて独特な造形、彫刻思想から生まれている事がわかる。

参考文献

- 1) 土木学会デザイン賞ホームページ 2007 年モエレ沼公園 <http://www.jsce.or.jp/committee/isd/prize/2007/works/2007g2.html> 小野寺康のコメントより引用
- 2) ISAMU NOGUCHI イサム・ノグチ庭園美術館 2009. 11.17
- 3) 田井洋子、佐々木邦博 「イサム・ノグチのコネティカット・ゼネラル生命保険会社庭園とユネスコ本部の庭園」ランドスケープ研究・日本造園学会誌 70 pp359-364 2007.03.30
- 4) 田井洋子、佐々木邦博 「イサム・ノグチの萬来舎とリーダーズダイジェスト東京支社庭園」ランドスケープ研究・日本造園学会誌 69 pp373-378 2006.03.27
- 5) 熊澤英二、折坂智美 「イサム・ノグチ "PLAY GROUND" の景観論的研究 I (計画系)」日本建築学会北陸支部研究報告集 40pp369-372.2005.07.10
- 6) 熊沢英二 「イサム・ノグチ "PLAY GROUND" の景観論的研究Ⅲイサムノグチ書簡の分析 (計画系)」日本建築学会北陸支部研究報告集 49pp407-410.2006.07.09
- 7) 熊沢英二 「イサム・ノグチ "PLAY GROUND" の景観論的研究Ⅳ：ノグチの制作における「大地」その一 (計画系)」日本建築学会北陸支部研究報告集 50pp495-498.2007.7.15
- 8) 八代克彦 「モエレ沼公園に託したイサム・ノグチのメッセージ」モエレ沼ランドオープン記念イサム・ノグチ展 pp33-50.2005
- 9) アナ・マリヤ・トーレス 「ISAMU NOGUCHI A Study of Space」2000
- 10) 川村京子 ヒアリング調査
- 11) アカリジャパンパンフレット
- 12) Japan House Speech 1988.4.26 著者訳
- 13) DVD 「Dream Window Reflection on the window 庭との語らい」1992 谷口吉生のコメントから引用
- 14) 川村純一 著者との会話より 2010.01.17
- 15) イサムノグチ 小倉忠夫訳 ある彫刻家の世界 1969.11.20
- 16) 京都賞受賞記念公園 1987 稲森財団

図版出典

明記の無いものは著者撮影・作成のものである。

- Fig3: 参考文献 8) p.46
 Fig4: 綿引幸造 「イサム・ノグチの世界」1998.6.30p.46
 Fig5: 参考文献 8) p.65 一部加筆
 Fig6: 参考文献 8) p.129
 Fig7: 参考文献 8) p.168
 Fig8: 参考文献 8) p.195
 Fig10: 参考文献 1)
 Fig11: 川村純一提供
 Fig14: 川村純一提供
 Fig15: 参考文献 1) 一部加筆
 Fig16: イサムノグチ財団 (NY) 提供
 Fig17: 安斎茂雄 「ANZAI Homage to ISAMU NOGUCHI」1992 p.19
 Fig18: 川村純一提供
 Fig19: 川村純一提供
 Fig30: 綿引幸造 「イサム・ノグチの世界」1998.6.30 p.206